

イクヨ 完成稿

イクヨ

何もないところだった。何もなく、暗いところだった。どこまでも続くのであるという広さを否応なく感じさせた。上も下も右も左も、見渡す限り暗かった。

しかし、一本の線があった。白く、まっすぐと続いている線が、どこまでも続く暗がりの中にあった。

白い線はどうやら、道であった。

道は、玉砂利のような白くて丸い石がいくつも重なって出来上がっており、ちょうど、人が苦も無く通り過ぎることのできる程度の幅があった。両脇には何もなく、道の先も後ろにもやはり、何もなかった。ただ、ぼっかりとした暗さがどこまでもあるだけである。

そして白い道も、あたりの暗さと同じく、どこまでも、続いていた。

女の子が歩いていた。玉砂利の道の上をひとりの女の子が、歩いていた。

幼女、と呼ぶほど幼くもなく、少女と呼ぶほど小さくもなく、大人と呼ぶほど大きくもなく、女性と呼ぶよりは女の子と呼ぶことがしっくりとくる女の子だった。

女の子はイクヨといった。

イクヨはイクヨという名前だったが、自分がなぜイクヨという名前なのかを憶えていなかった。ただ、イクヨは気が付いたらイクヨという名前だった。

イクヨはどこまでも続く道を、どこまでも歩いていた。

一体、いつから歩いているのか、どこまで歩いていくのか、そういうことはわからなかった。いつから歩いているし、どこかへ向かって歩いていた。そういうことなのだとイクヨは思っていた。だから、終着点の見えないこの道を歩くことに、何か、特別な感情を抱くこともなく、ただ淡々と歩き続けていた。

前へ前へとイクヨは歩き続けていた。

この道を歩いていかなければならないと、イクヨは知っていた。黙々と、ひたすらに、歩き続けなければならないということをイクヨは知っていた。

選んだのだ。

イクヨはこの道を歩き続けることを選んだ。いつそうしたのかはわからなくとも、自分が選んだという事実だけは、はっきりとわかっていた。選んだのならば、この道が終わるまで歩き続けなければならない。

幸い、イクヨは疲れることを知らなかった。太ももが重くなることも、足の裏に豆ができて痛くなることもなかった。だから、ずっと変わらずに歩き続けることが出来た。

イクヨは道を歩き続けた。

道は、続く。どこまでも、どこまでも。

踏みしめる石の擦れる音が聞こえる。それ以外の音は聞こえない。耳を澄ませても、何も聞こえない。

と、

イクヨは気が付く。

耳に何か違う音の聞こえるのにイクヨは気が付いた。高く、連続する音。鳥の鳴き声に似ている。しかし、それは生き物の声とは全く違っていた。

トゥルルルル…

トゥルルルル…

トゥルルルル…

音は次第に大きく聞こえてくる。やがて、他にも音が聞こえてきました。

機械が深く唸って通り過ぎる音。何者かの話声。ざわめき。コツコツといった規則的な足音。それらの音は、混ざり合い重なり合い、膨らみ溢れるように大きくなっていく。

音が溢れるにつれ、道の脇の何もないところから、無数の高層ビルが生えてきた。

イクヨの歩き続ける道の両脇にビルは生え、道に交差する形で新しい道が現れた。そして、3  
新しい道の脇にもたくさんさんのビルが現れていき、イクヨが歩いていた玉砂利の道はいつの間にかアスファルトの黒い歩道に代わり、傍には三車線の広い車道が通っていた。いくつもの車が、車道を走っていく。

歩道にはたくさんの人がせわしなく行きかっており、イクヨも周りの人達の歩調に合わせて、足早に歩いていた。

その時、またあの音が聞こえた。

トゥルルルル…

トゥルルルル…

トゥルルルル…

その音はどうやらイクヨのすぐ近くから聞こえるようだった。イクヨは慣れた自然な動作で上着のポケットから携帯電話を取り出し、着信ボタンを押した。

「はい、もしもし」

イクヨは、34歳のOLになっていた。

「主任、確認をお願いします」

と、イクヨに一束の書類が差し出された。

パソコンの画面から目を離し、何枚かの綴りになっている書類を受け取り、内容を確認する。そして、デスクの引き出しから付箋を取り出し、書類の何枚かにメモ書きを貼り付け、書類を提出してきた部下の男に無言で手渡した。

「何か、不備がありましたか？」

「不備があるから指摘を書きました。口頭でもお伝えしたほうがよろしいですか？」

いくらか厳しい口調のイクヨの言葉に部下は何か言おうとした。だが、彼が口を開く前にイクヨは言葉を付け加えた。

「あと、書面で印刷する前に必ずメールで送ってください。紙がもったいないですから」何か、謝罪の言葉のようなものを口にして部下は自分のデスクへと戻った。

悪口だったのかもしれない。イクヨはパソコンの画面に向き直りながら、誰にも聞こえない程度に小さくため息をつく。

彼女は社内で厳しいと呼ばれることの多い人物だった。しかし、それはあくまで客観的に見た判断に過ぎないとイクヨは考えていた。主任という立場上、厳しい物言いをしなければならぬ局面も多々ある。他の一般社員と比べ、自ら業務にあたるよりも、彼らが行う作業の管理が主な仕事なる。そして、管理が仕事ならば、何らかの指示を伝えることそのものが仕事なのだ。少なくない部下の数に、少なくない業務量。その一つ一つに事細かに丁寧に指図するわけにはいかない。懇切丁寧に対応する時間などない。必然、選ぶ言葉はシンプルに、端的で的確なものとなる。

そのように仕事をしているうちに、厳しい人、というレッテルがイクヨには貼られていた。別にその程度のレッテルで何か思うわけではない。たとえそれが悪口の部類に入るようなことであつたとしても、それを上回る仕事をイクヨはこなしている。その仕事ぶりに対して、部署の人間は誰も、文句を言うことはできない。

『イクヨ主任』

と、デスクの上のプレートをイクヨは眺めました。それがイクヨの肩書である。先日、辞令が出され、間もなく係長だが、課長代理だかに昇進することも決まっている。

肩書や立場など、そんなものは自分で選んだわけではない。管理職に就くことを喜ぶ者も多いということは知っている。同時に、煩わしく感じる者も同じぐらいいるのだということも知っていた。イクヨはどちらかと言えば後者の人間だった。昇進や昇給など興味がなかった。ただ、黙々と効率的に仕事を行うことが勝手に評価されてきただけである。

厳しい人、と言われているにも、イクヨはある程度の人望があつた。特別、何か愛想を振りまいたり、気を遣ったりしたわけではなかったから、勝手に尊敬をしたり、信頼したりされることにイクヨは疑問を感じていた。そしてそういう人たちの心理がうまく理解できなかった。

——きっと、自分で選んでいないからだ。

自分で選んでいないから、人のことを信用できるのだとイクヨは思った。  
昇進が早いから。

仕事が評価されているから。

上司に信頼されているから。

上司は有能な部下に仕事を預けられるから。

余計なことを喋らないから。

お酒の席に誘うこともないから。

愚痴を言わないから。

悪口を言わないから。

そういうことを考えていると、なんだか頭の中に靄が溜まっているような不快な感覚になる。パソコン画面の時計はちょうど19時前を指していた。いつもよりはいくらか早い、イクヨは会社を出ることにした。

欲しいものがあるなら自分で選ぶべきだ、とイクヨは考えていた。要らないものがあるなら自分で選ぶべきだ、とも考えていた。自分で選んでいないものが手元にあるなんてひどく気分が悪いことだ。

だから、今度の昇進の辞令はイクヨにとってひどく気分の悪い出来事に他ならなかった。自分で選んだもののばかりで世界が出来ていればいいのと思う。しかし、会社という単位の中に長くいると、自分で選ぶことのできるものがとても少ないことがわかる。他人に選ばれることは多くあったとしても、自分で選ぶことは少ない。たとえ、自分の意志で選ばなければならぬことがあったとしても、それは自分ではなく、誰か他の人間の意思であり、その他の人間はどこか別の他の人間の意志で何かを選んで、自分も…

「いかがですか？」

女性のにこやかな声と差し出された鏡にイクヨはぐるぐると回し車のように回転していた思考を止めた。

イクヨは週末にある友人の結婚式のために、新しいメイク道具を買いに来ていた。

20時を過ぎた大型百貨店の化粧品売り場にはイクヨと数名の従業員しか見えない。イクヨは試供品の散らばったカウンターに腰かけ、対面で座る従業員から化粧品の説明を受けていた。

向かい合わせでほぼ笑む従業員の女の顔は自分の顔なんだろうか、とイクヨはぼんやりと思った。

「どうですか？ お気に召しました？」

言われて、鏡に映る自分の顔を眺める。いつものメイクよりもかなり厚く、そして派手な顔がそこはあった。

「ちょっと濃くないですか？」

率直な感想を口にする。普段、顔はしっかりと作ることの多いがさすがにここまでのメイ

クをしたことはない。

「結婚式なら、これぐらい派手でも問題ないですよ」

「そういうものですか」

「そうですね。あと、失礼かもしれませんが、お客様は独身ですか？」

少し下世話な笑顔をして小声になる。30代半ばの独身女はみんな自分が独身であることを隠したい、とでも言わんばかりの小声。

「ええ、独身ですよ。仕事ばかりしていた——」

「それならこれぐらい派手な方が絶対いいですよ！ やわらかい印象にもなるから、男受けもしますし！」

イクヨの言葉をさえぎって、突然大きな声で彼女は身を乗り出してきた。

「お客様がお店にいらっしゃたとき、どちらかというと、スマートな感じ、というかこう、シックなメイクされてるなああって、私思ってたんですね、で、その次に、あ、指輪してない！ って気づいちゃって、だから、お客様から結婚式って言葉が出てきたときに、私、頑張るなきゃ！ って思って、こういうメイクさせてもらってたんですよ。普段、メイクしつかりされてるようなので、私がやったようなメイク方法は簡単にできると思うので、あとはこれと、このコスメ使ってもらえればあ……」

イクヨが声を上げる隙間もなく、女性従業員は喋り続ける。

この人の言葉なのだろうか。

30代半ばの独身女性には同じような接客をしているのだろうか。けれど、もしそうだとしたら、この女性は自分でその言葉を選んで接客をしているのかもしれない。だとするなら、イクヨは目の前で夢中にしゃべり続けている彼女に好感を抱くことが出来た。

「じゃあ、これ、全部ください」

イクヨはたくさんの化粧品の入った紙袋を手渡されカウンターを立った。

帰り際、先ほどの女性従業員が素敵な笑顔で、

「頑張ってくださいね！」

と言ってきた。

結婚式に行くだけで、何を頑張るというのか。結婚式での出会いに期待すればいいのだろうか。けれど、知り合いが大勢いる場所でそんなことに期待する気持ちをイクヨは持てなかった。結婚式に出席する友達の間とは結婚して、子供がいる友人もいる。それに、そういった場で相手を探すこと、そもそも、結婚すること自体、イクヨはどうでもいいように感じていたのだ。

では、なぜイクヨは化粧品を買ったのだろうか。

誰のために買ったのだろうか。紙袋にぎっしり詰まった新品の箱を眺めて、イクヨは思う。この化粧品は、誰が選んだのだろうか？

『イクヨ主任』という肩書と同じように、誰かの意志で勝手に選ばされたものではないの

かと、イクヨは思った。そしてそれは真実のように感じることが出来た。

部下の困った顔。

化粧品売り場の女の人。

デスクの上の役職のプレート。

化粧品の箱。

独身の自分。

昇進する自分。

出会いを期待する自分。

どこに、自分の選んだものがあるのだろうか。何を選んで、どこに行こうというのか。ふと、

電話の音が聞こえた。

トゥルルルル…

トゥルルルル…

トゥルルルル…

イクヨは慣れた動作で上着のポケットから携帯電話を取り出そうとした。しかし、イクヨは上着など着ていなかった。

そもそも、電話の音などどこからも聞こえない。

イクヨは再び、道の上に立っていた。どこまでも続く、白い道の上に立っていた。ビルも、車も、アスファルトの道路も、消えていた。

イクヨの手には、化粧品の詰まった紙袋があった。首からは『イクヨ主任』と書かれた茶色のプレートが下がっている。

イクヨは歩き始めた。

どこまでも続く道を、歩き始めた。

ずっと先まで続く道を、歩き始めた。

鐘の音が聞こえる。玉砂利の道に鐘の音が聞こえていた。

はじめは細く、遠い音だったが、歩き進めるにつれて、鐘の音は太く力強くあたりの暗がりに響き渡っていく。しかし、歩けども、一向に鐘の姿は見えない。壮大な音をまき散らしている正体にたどり着かない。

歩を進めれば進めるほど、鐘の音は大きくなっていく。あまりの大音響に玉砂利の石がリズムに合わせて震えるほどだ。鐘の音は耳と言わず、頭にも、体中にも響き渡る。イクヨの体自体がその音を出しているかのように震えている。

うるさいとか、喧しいとか、そういう言葉を通り越して、これはもはや災害のようなものだ。地震ならば身を隠せばいい。津波なら高台へ。大火事なら遠くへ離れてしまえばいい。しかし、大音響はどうすればいいのか。体ごと激しく揺らしてくる大きな音に対してどうやって避難をすればいいのか。

イクヨは揺れる体で無理矢理に前へと進みながら考える。考える頭でさえも揺れて、自分の考えがまったくまとまらない。収まらない振動は関節という関節も揺り動かし、震える膝は体重を支えることが出来なくなつて、イクヨは玉砂利の道へどうつと倒れこんだ。

倒れこんだ拍子に、下げていた紙袋から化粧品箱が散らばった。ネイル、チーク、リップ、ファンデーション……。綺麗な梱包の化粧品たちはこんな時には何の役にも立たない。顔を綺麗に見せることに特化した道具。そのような目的で作られた物。今必要なのは顔を作ることじゃない。耳を塞いで、振動に耐えることだ。

イクヨは大音響に震える手で、手近にあった筆ペンタイプのアイライナーを取った。そしてペンの太さの具合を確かめると、自分の右耳に突っ込んだ。そして、同じように転がっていたペンシルタイプのアイライナーも左耳に押し込む。

突然、

嘘のように音が聞こえなくなった。

あれほど響いていた振動も感じない。しかし、道の石や玉砂利の上の化粧品の箱たちは細かく、規則的に揺れている。音は続いているようだ。

イクヨは震える道に手をついて転ばないようにゆっくりと立ち上がり、首からかかる役職プレートの裏面で自分の顔を眺めた。鏡面に細い棒を両方の耳から生やした姿が映っている。

なんと馬鹿みたいな恰好か。

イクヨはおもむろに、足元で細かに震える化粧品の箱に手を伸ばし、包装を解いた。

ファンデーション、

下地、

コンシーラー、

リップ、

アイシャドウ。

つけまつげ。

そして、包装を解いた先から、自分の顔にメイクを施していく。鐘の音は未だに鳴りやまないようで、道の上に無造作に捨てられた箱が規則的に揺れている。

イクヨは、役職プレートの映りの悪い鏡面に向かい、無心で顔を作っていく。イクヨの肌は、メイクなどしなくとも、白く、きめ細かく、皺一つなかった。唇も若く鮮やかで、その上に色を重ねる必要もないほど、艶やかである。眉毛も睫毛も黒々と美しく、毛の一つ一つがしなやかな張りを持っている。

およそ化粧など必要のない自分のパーツの一つ一つを丁寧に作り直していく。

肌の白さがファンデーションで作り物めく。唇の上に乗ったリップで偽物の艶を生み出す。血の通った可愛らしい頬に、嘘くさいチークを乗せる。本来そんなところには存在しないはずの色を、頬の上に乗せる。

そして最後に、両方の耳に突き刺さっていたアイライナーを抜き取り、ペンシルの先を目頭に深く入れる。

鐘の音が、聞こえた。

イクヨは、36歳の花嫁だった。

「とてもよく似合うよ」

真っ白いタキシードに身を包んだ夫が、姿見越しに言った。その声はとても感動しているという様子だった。

イクヨはウェディングドレスを着ていた。真っ白で、シルエットのすっきりとした袖付きのシンプルなドレスだ。シンプルだが、上品でどこかクラシカルなシルエットのドレスだった。

「ありがとう」

と、イクヨは小さく微笑んで答える。

茶色の木枠にしゃれた装飾の施された大きな姿見にイクヨの姿が映りこんでいた。

全体的にシンプルな格好だとイクヨは思った。ウェディングドレスから、化粧に至るまで、印象として派手さはどこにもない。予算を低く見積もったと言われても文句が言えないほどの質素さがあると、イクヨは感じた。

「とても素敵だ」

控室に二人きりであるのを良いことに、夫が後ろからイクヨの腰に手を伸ばし抱きしめる。イクヨは夫の手に自分の手を重ねた。

「嬉しい」

と、言った。

嬉しい、という言葉以外の選択肢がどこにもないなど、イクヨは思った。これから式の本番を迎える新郎新婦の会話に選択肢なんてどれくらいあるのだろうか。肯定的な言葉を選択することしかできない。否定的な言葉なんて口にできるはずがない。

イクヨはそのクラシカルなウエディングドレスを気に入っていなかった。

はじめ、イクヨはもっと大胆で派手な印象のドレスを希望した。背中と肩が大きく開き、レーストリボンがふんだんにあしらわれたとても可愛らしいドレスだった。しかし、そういったデザインドレスを夫は好まなかった。

今年40歳を迎える夫は派手さを好まない性分だった。もともと、ドレスに関して言うなら、性分というよりも、世間体を気にしたという方が大きかったのだろう。30歳も後半となる自分の伴侶が、年甲斐のない派手なドレスを着ていることの周りの目を気にしたのだ。そういう古い考えの人間だということをイクヨはよく知っていた。

2年前、友人の結婚式で知り合った夫は、とかく周りの目を気にする男だった。周りや世間の目を気にするあまり、間もなく40歳を迎える自分がまだ独身であることに耐えられなかったようで、出会った当初は嫌というほど必死に口説かれた。たくさんのプレゼントや愛情ある言葉を受け、付き合い始めてから結婚までの道のりは相当にスムーズなものだった。そもそも、夫には結婚を前提として付き合い、籍を入れ、然るべき式を執り行うまでの綿密なプランがあった。30歳を過ぎた頃から細かく計画を練り、外枠のプランは完璧に固まっていた。後はその中身に適切な誰かを入れ込めば、夫の幸せな結婚計画は完成するわけだった。

——私はお弁当の具だ。

イクヨは夫の手のぬくもりを感じながら鏡を見つめる。夫はイクヨの首筋に顔をうずめ、幸せを——あるいは自分の人生プランの完成を——噛みしめているようだった。

姿見に夫の禿げた頭が映っている。タキシードの腹回りが膨らんでいる。そして、中年域に達した男の独特な脂のような匂いが漂ってくる。

「とても幸せだ」

夫が顔を上げ、鏡越しに目を合わせてくる。顎の下に肉がついている。鼻は大きく、目は小さい。

良い男ではない。いい中年男だ。いい年をした中年だ。漫画やドラマなどに出てくるデフォルメされた中年男そのままの容姿。性格は几帳面で神経質。好物は酒。趣味は特にない。別に、愛してなどいなかった。ただ、この男の愛情を受け入れただけのことであって、その愛情を返す義理などないとイクヨは考えていた。利害の一致に過ぎない。結婚をした方が人生の都合がよかったただけだ。そもそも、単純に、夫の性格や容姿はイクヨの好みとはかけ離れていた。

控室の扉がノックされ、式場の係りの人間の声がした。

「行こうか」

夫はイクヨから離れ、イクヨの手を握る。

手汗で湿った手の平をイクヨは握り返した。

「係長、おめでとうございます!!」

披露宴の会場で、会社の人間がイクヨに挨拶をしてきた。皆一様に酒で顔を赤らめ、ほぐよくだらしない顔になっている。

「係長、綺麗です!」

派手なメイクをした後輩社員が言ってくる。

「私も、係長に負けないように、素敵な人、見つけますからね!」

負けないのは早く結婚する、ということだろうか。素敵な人とは、少し嫌味が入っているのかもしれない。〇年前、友人の結婚式に出席したとき、自分も彼女と同じぐらい濃い顔をしていたのだろうか。

披露宴でのドレスも、質素なものだった。レンタルのドレスにはたくさんの種類があったのに、夫はほとんど即決でこのドレスを指名していた。イクヨの意見など聞かなかったことを考えると、ドレスまでも彼のプランの一部に含まれていたらしい。

綺麗なドレスに執着心があるわけではない。ただ、着てみたかっただけだ。結婚というイベントは人生の中でそれほど多くあるわけではない。パーティドレスとは違う、いわゆるドレスと呼ばれる華美な服を着る機会など、今後訪れることはないだろう。なのに、今着ているドレスは夫が普段使っているアルミ製の弁当箱のように余分なものがない。必要に求められた機能しか備わっていない。スパナやレンチのような一種の工具のような印象さえ感じた。

美しさとは、必要以上のものがそこに詰め込まれているからこそ価値がある。ウェディングドレスとはまさに必要以上の美しさが詰め込まれたものだ。必要最低限の道具とはわけが違う。

しかし、このドレスは、白くて、白くて、白い。

それだけが自分の取り柄だとしても主張しているような白々しいドレスを着た自分も、結局は夫にとっての必要な道具の一部なのだろう。そして、道具の一部になることを自ら選んだ。世間体の話をするなら、イクヨ自身も同様だ。独身の〇〇代半ばのOLがどんどん昇進するのをよく思わない連中も多く、知らぬ間に社内に敵を作っていた。親戚一同や両親からの結婚の具合を確かめる電話も煩わしかった。

会場を見渡す。イクヨの会社の人間が大きな声で騒いでいる。

夫の会社の人間が、名刺交換をしている。

イクヨの家族がこちらを見ないで一心不乱に料理を食べている。

BGMに定番らしいポップミュージックが流れている。

隣の席で夫がにこやかにワインを何かを飲んでる。

夫がこちらを見て、ほほ笑んだ。

——白々しい。ドレスと同じで、白々しい。

「それでは新郎新婦による、ケーキ入刀です！」

司会者の言葉を合図に、会場に巨大なケーキが運ばれてきた。

会場の係りの人間に誘導され、イクヨと夫はケーキの前で大きなナイフを持たされる。

「新郎新婦の初めての共同作業です！ 皆さん、カメラのご準備はよろしいでしょうか！」  
司会者の煽りの声に、ゲストたちが周りに集まり、スマホやカメラを構えてくる。もうすでにシャッターを切っている者もいる。

イクヨは愛想笑いを浮かべながら、白くて大きなケーキにナイフを突き刺した。

同時に、一際大きなBGMが始まり、クラツカーの破裂音が響き、場内に歓声が巻き起った。

「絶対に幸せにするからね」

夫が周りのムードに感極まったのか、涙をしながらイクヨの肩をつかんだ。  
そしてそのまま、イクヨの唇にキスをした。

酒と人間の脂の混ざった不快な匂いに、イクヨは後ずさった。

「なんで逃げるんだ？」

夫の困惑した顔がそこにあった。

夫の後ろにはなにもない暗さがあるだけだった。披露宴の喧騒もやかましいBGMもなかった。

玉砂利の道の上には白いドレスのイクヨとタキシードの夫しかいなかった。

鐘の音は聞こえなかった。

イクヨは辺りに散らばった化粧品を紙袋に入れるとドレス姿のまま白い道を歩きだした。

「どこに行くんだい？」

と、夫が後からついてきた。

首にかかる役職プレートが、揺れていた。

イクヨは歩いていました。

白い玉砂利の道を歩いていました。

手には化粧品がたくさん詰まった紙袋を下げ、首には『係長』と書かれた役職プレートを掛けていました。

イクヨはウェディングドレスを着ていました。真っ白なウェディングドレスと同じく真っ白なハイヒールを履いていました。ハイヒールの踵は玉砂利の石の間にいちいち深く刺さるので歩きにくくて仕方ありません。

イクヨの少し後ろに、タキシード姿の太った中年男が付いてきていました。男はふうふうと荒く息を吐きながら、よろよろと付いてきていました。

「休まないかい？」

中年男は荒い息の合間に情けない声を出しました。

中年男はイクヨの夫でした。しかし、イクヨはこの男を夫として認識していませんでした。ただの結婚相手であるという程度の認識でしかありませんでしたから、ほとんど家具や工具と似たような感覚しか持ち合わせていませんでした。だから、家具や工具が言ってくる言葉なんてほとんど無いようなものだと感じましたので、イクヨは歩くことを止めませんでした。

いちいち、男の言うことを聞いて休む必要などないのです。イクヨはこの道を歩かなければならないのですから。

「ねえ、聞こえてるんだろう？」

ふうふう、と夫の男が言っています。

「ねえ、少しばかり休んでもいいと思うんだよ」

ふうふうと、中年男が言っています。

「そんなハイヒールを履いて、君だって疲れているんだろう？」

いいえ、疲れてなんかいません。

イクヨは立ち止まりました。中年男は少し離れたところで、安心したといった様子で道に座り込みました。イクヨはおもむろにハイヒールを脱ぎました。ドレスと同じ、何の装飾もないとてもシンプルなハイヒールです。これもドレスと同様に、この男の趣味でした。

イクヨは無言で手にしたハイヒールを男に向かって投げつけました。なんだかひどくそうしたい気分だったのです。ハイヒールは男の頭と腹にほとんど同時にあたり、男は、痛いとかなんとか声を上げて、唸り声を上げました。

「何をするんだ」

イクヨは男の声を無視して歩き始めました。裸足の足はやはりとても歩きやすく感じられました。

「ねえ、止まっておくれよ！」

男が情けない声を上げています。

でも、そんな声に従う必要などありません。イクヨは男を愛してなどいませんでしたから。「なんでそんなに先を急ぐんだ！」

そんな声など、耳に入りません。イクヨは男の物ではないのです。イクヨは自分の都合と男の都合をすり合わせ、自分にとって利があると感じたから男の一緒になったに過ぎないのです。いろんな人の言葉や気持ちなどを合わせてそうする外なかったから男と結婚までしたのです。

でも、この道の上で妻になる必要なんてありません。この道を歩き続けなければならないのです。それは他ならず、イクヨが選んだことなのですから。

「僕を置いていくなら、そのドレスも置いてくんだ！」

よくわからないことを男が叫びました。こういった理屈でそう言った言葉が出てくるのかイクヨは不思議でした。

「早く、ドレスを置いていけ！」

情けない声を男は出しています。どうやら怒っているようです。イクヨはいくらか不快な気持ちになりました。なんで行く道を邪魔しようとするのでしょうか。歩くことぐらい勝手にやらせてもらいたいものです。

イクヨは立ち止まって、背中に手を伸ばしてファスナーを下ろし、ドレスを脱ぎました。やわらかい音を立てて、ドレスが道の上に落ちました。

下着姿になったイクヨは足元のドレスを取り上げて、男の方を振り返りました。

すると、男がイクヨに向かってハイヒールを投げつけていました。

激しい音がして、スープの入ったお皿がイクヨの腕に当たりました。スープは作りたてであたたかな湯気を出していましたから、イクヨの腕スープがたっぷりとかかった時、イクヨは思わず小さな悲鳴を上げてしまいました。

すると今度は、サラダの入った大きなお皿がイクヨめがけて飛んできました。イクヨは咄嗟に顔を守るために腕で頭を覆いましたから、火傷している部分に強く当たって、イクヨはたまらず床に倒れこみ、野菜の入っていたお皿は床に当たって砕け散りました。

イクヨは短く唸り声をあげます。床にはスープが散らばって、かすかな湯気を上げています。真っ赤なミニトマトと鮮やかな緑のレタスも散らばっています。

足音が近づいてきます。

イクヨはうずくまりながら、自分の体を丸くしました。足音の後にやってくる強い衝撃に耐えるためです。

足音がイクヨのすぐそばで止まりました。そして、イクヨのお腹に激しい衝撃と痛みが走ります。イクヨは思わず先ほどまで食べていたパンを口から戻してしまいました。

また、衝撃が走ります。何度も、何度も、痛みと共に何度も、何度も。

痛みを通り過ぎて、気持ちが悪くなります。胃がせりあがってきて、お腹の中身が出てし

まいます。うめき声が何度も出ます。けれども、決して悲鳴だけは上げませんでした。ただとにかく、大きな声を出すまいと、イクヨはひたすらに耐えていました。災害が通り過ぎるのを待つように、ひたすらに耐えていました。イクヨは何もできず、ただ床にひれ伏しています。

足音が通り過ぎ、ドアを開ける音がしました。

イクヨは長い間、じっと床に倒れていました。

お腹が痛いです。

腕も痛いです。

のどが胃液でひりつきます。

涙と鼻水で顔がぐしゃぐしゃです。

苦しいです。イクヨはひどく苦しいと、感じていました。

イクヨは24歳のDV夫を持つ妻でした。

暴力がいつ頃から始まったのか、覚えていませんでした。

少なくとも、半年より前から始まっていたと覚えています。

夫はそれでも、優しいところもあるのだと、イクヨは思っていました。

事実、優しくされることがあります。

ありますから、二人で住むマンションから出ていくことが出来ないのだと、イクヨは思っていました。

けれど、時折、命の危険を感じるほどの暴力を受けることがありました。

そういう時ばかりは、もう逃げ出そうと強く思います。

けれど、イクヨが逃げ出すことはありません。

昔は、それこそ、夫が手を上げ始めた当初こそ、逃げ出すことができました。

逃げ出して、夫の怒りが収まるころを見計らって、自宅に戻ると、夫はそれはとても謝ったものでした。

土下座までして謝ってくれていました。

このところ、イクヨは夫の暴力から逃げ出すことはなくなりました。

そんなことをしても、結局は殴られるのです。そんなことをしても、結局は何かを投げつけられるのです。

離婚することも考えました。

離婚届を差し出したこともあります。

しかし、それでも暴力を振るわれました。

それでも、なんとか頑張って、離婚届を何度も何度も差し出しました。そうすると今度は、夫は泣きながら謝りました。

二度としない。

暴力を振るって悪かった。

大人の男が一心不乱に泣きじゃくっている様はなんて無様なんだろうと思いました。

そう思ってしまうと、次に湧き出てくる感情は哀れみでした。

哀れみを感じてしまうともう、どうしようもありませんでした。

その後、ひと月と経たずに夫の暴力は再開されました。

しかし、一度哀れみを感じてしまったイクヨは、もう駄目でした。

逃げ出すことも反発することも、対抗することも助けを求めることもできませんでした。自分に対して一生懸命に暴力を振るい続ける夫が哀れで、そしてあまりにも可哀そうだと感じてしまうのです。

だから結局のところ、ただ自分が耐えて、我慢する他ないという選択をし続けているのでした。

思えば、昔から、ひどい男と付き合うことが多いとイクヨは思いました。

金に汚かったり、平気で嘘をついてきたり、浮気をされたり。

男運がないのだと、友達はずけてイクヨをからかったものでしたが、付き合う男が元々ひどい男なのか、それともイクヨと付き合ってしまったからひどくなっていくのか、イクヨにはわかりませんでした。

夫も、昔は優しい男でした。優しくされたことが最近は無かったとしても、優しくしてくれた時の顔はよく覚えています。その顔をまた見たいとイクヨは夫の暴力に耐えている間、強く思うのでした。

イクヨは痛む体をゆっくりと起き上がらせ、あたりに散らばった野菜を拾います。レタス、トマト、キュウリ。

拾った野菜をごみ箱に捨て、割れた皿をちりとりに集め、スープを雑巾で拭き取ります。と、

雑巾を滑らせていた時、まだ取り切れていなかったお皿の破片が指先に刺さりました。

右手の中指から丸々とした血が溢れ、ぷつりと、こぼれました。

同時に、涙がこぼれました。

ただ、涙がこぼれました。

血の痛さも、体の痛みも、どうでもよくなって、ただ、涙が溢れました。溢れて、溢れて止まりませんでした。

イクヨはただひたすらに泣きました。床に崩れて泣きました。声を上げて泣きました。いつまでも泣きました。

どれほど泣いていたのかはわかりません。窓から差す光の角度がずいぶん変わっていました。イクヨは後片付けの続きをすることにしました。

一通りのことを終えて、イクヨはキッチンに立ちました。呆然と立ち尽くしました。何かを考えていました。いえ、何も考えていなかったのかもしれない。イクヨの呆然と

した目は、何かを見ていたし、何も見ていませんでした。

悲しいとか、辛いとか、そういう気持ちはどこにもありませんでした。そういった感情がどこにあるのか自分でもよくわかりませんでした。流した涙の原因さえなんだったのか、よくわかりません。

夫は殴りつけてきます。イクヨが何をしても、何かが飛んできます。何をしたらいいのかわかりませんでした。何も、わかりませんでした。

やがて、日が暮れていきます。イクヨはキッチンから離れられませんでした。

日が落ちて、夜になりました。もうすぐ夫が帰ってきます。夕食の準備をしなければなりません。けれど、夕食を作ったところでどうせ無下に扱われるだけでしょう。なら、夕食を作る必要なんてあるのでしょうか。

けれど、何かを用意しなければなりません。

イクヨは明かりを点け、夕食の準備に取り掛かりました。

冷蔵庫の中から簡単な食材を出し、まな板の上に並べました。

玄関のカギを開ける音がしました。夫が帰ってきたようです。

イクヨは玉ねぎを刻んでいました。

イクヨは玄関に夫を出迎えに向かいました。そうしないと、殴られるからです。

夫が玄関のドアを開け家に入りました。

イクヨは夫に向かって、ぶつかりました。

なんの躊躇もなく、戸惑いもなく、ぶつかりました。

夫は何が起ったのかわからないという顔をしていました。

イクヨはその顔を見て、ああ、こんな顔をしていたんだっけなと思いました。

夫はぶつかってきたイクヨを力いっぱい突き返しました。

あんまりにも強い力だったので、イクヨはまた床に倒れました。

夫のお腹の辺りが真っ赤でした。

イクヨの手にはさっきまで玉ねぎを刻んでいた包丁が夫の血で真っ赤になっていました。

夫はひどい顔をしていました。ひどい男がひどい顔をしているのはなんだか滑稽だと思いました。

イクヨは包丁を持ったままゆっくりと立ち上がり、ひどい顔の夫に向かって包丁を振り下ろしました。

肩だか、腕だかに包丁は刺さりました。夫は悲鳴を上げました。

イクヨは何度も包丁を夫に刺しました。

夫は抵抗しました。暴れました。

夫の拳が、お腹に当たりました。夫の足が、腰に当たりました。

けれど、これまでもっと強く殴られ続けてきたのです、そんなのはなんでもありません。

何度も何度も、包丁を振り下ろしました。

イクヨは夫の返り血を全身に浴びて真っ赤になっていました。

そして玄関に横たわる夫も、真っ赤になっていました。  
床に転がったトマトみたいだなあと、イクヨは思いました。  
ぼんやりと、そんなことをイクヨは思いました。

「やめろ！ やめてくれ！」

中年男が突然叫びました。

足元には投げつけられたハイヒールが転がっています。

「二度とそんなことはしないから、許してくれ！」

ひどくおびえる中年男の目の先には、イクヨが持っている血だらけの包丁がありました。  
ぼたりぼたりと、滴る血のせいでイクヨの手は赤くなり、足元に脱ぎ捨てられた真っ白い  
ドレスも赤く濡れてしまっていました。

イクヨは包丁を眺め、目の前でおびえる男を見つめて、道の先へと振り返りました。

そうして、男に告げました。

「私は向こうに行きたいの」

そう言っ、イクヨは再び歩き始めました。

中年男が自分の投げたイクヨのハイヒールと赤く濡れたドレスを拾い上げて、イクヨの  
後に続きます。

右手に化粧品の紙袋と左手に血だらけの包丁を持ち、首から役職プレートを下げたイク  
ヨは下着姿の裸足のまま、白い道を歩き始めました。

イクヨは落ちていた。

真っ逆さまに暗がりの中を落ちていた。

上の方に、歩き続けていた白い道が浮かんで、暗がりの中に一本の線となっていた。

イクヨは落ちていた。

イクヨと一緒にあって、化粧品だとか、包丁だとか、プレートだとかも落ちていた。

ウェディングドレスを抱えたタキシード姿の中年男もバタバタと回転しつつ、何事かを叫びながら落ちていた。

イクヨは暗がりの中をどこまでも落ちていた。

どうしてこうなったのだろうか。

歩き続けていた玉砂利の道の幅がだんだん狭くなっていた。狭くなって、平均台のような細さになっていた。そこを進もうとして、足元の石が滑ったのだ。つかまるところと言えば、すぐ後ろをついてきていた中年男だけで、しかし、彼のタキシードの袖口に咄嗟に掴んだはいいものの、男は踏ん張りを効かせるわけでもなく、共に道から外れて、暗がりの中に落ちる羽目になったのだ。

こうこうと、風の鳴る音が耳にしている。眼下の暗がりはどこまでも続いていて、終わりが見えない。落ちながら上を見上げると、真っ白い線となった道が変わらない大きさと細さでどこまでも伸びている。

化粧品も、包丁も、プレートも、中年男も、最初に落ちた時とほとんど変わらない距離にある。どのくらい落ちているのかわからないが、どのくらい落ちても見えるものが変わらないから、自分が本当に落ちているのか、それとも、暗がりの中にただ浮かんでいるだけなのかかわからない。

ただ、こうこうと喧しく鳴り続ける音と、髪を揺らしている風が落下の事実を伝えている。どこまで落ちるのだろうか。

歩き続けているのと変わらない。どこまでも落ち続けている。もし、落ち続けた先にまた何かがあって、命に障りがないのなら、歩き続けるよりも楽なのではないのだろうか。と、

イクヨはそんなことを思った。

歩くたびに、年を取ったり、若くなったり、暴力を振るわれたり、好きでもない男と結婚する羽目になった。

歩くたびに、要らないものが増えている。

ただ、歩いているだけだ。歩くことだけを望んだし、選んだ。だからひたすらにイクヨは自分の目の前に果てしなく続く道を歩き続けている。疑問もない、迷いもない。ただ歩くことだけが目的だ。それだけのひどくシンプルなものだ。右の足と左の足をどこまでも動かし続けていく行為。それだけの行為。

イクヨと一緒に落ちている自分の物を見た。

宙に散らばる化粧品を、包丁を、プレートを、中年男を見た。

あ・の・イ・ク・ヨ・は何も選ばなかった。

あ・の・イ・ク・ヨ・達は、何も選ばなかった。

選ばなかったから、今、自分が彼女たちの選ばざるを得なかったものを持たされている。道を歩き続けるイクヨのように、強い意志でもって何も選ばないという選択を行えばよかったのだ。

イクヨはなぜだかひどく苛立った気持ちになった。

他人の人生を押し付けられているのではないのだろうか。いや、まず間違いなく押し付けられている。

あのイクヨも、あのイクヨも、自分の人生に責任を持たず生きている。生きていた。

何も欲しない。欲しないから何かを持たされる。勝手に持たされ、持ったのだから、持ったものに対しての責任を負わなければならない。

会社の役職も、愛のない結婚も、暴力のある家庭も。

何も欲しないから他人の人生を押し付けられる。そして、押し付けられたものをさらに押し付けられる。責任を投げ出される。

あのイクヨ達は何もしなかった。

あのイクヨ達は何もしなかった。

私は、道を歩く。

イクヨは強く決意した。だが、同時に疑問が湧いた。

歩いて、どうなる？

歩くという行為は目的ではなく、手段ではないのか。目的地にたどり着くための手段ではないのか。歩く先に何かあるのかを気にもせず、ただひたすらに歩き続けることに何の意味があるのか。しっかりとした目的と選択でもって、道を歩き続けるとして、果たしてそれは何かを選んでいるという答えになっているのか。

では、答えはどこにあるのか。

イクヨの選択はどこにあるのか。

いくつものイクヨが何も選べず、道を歩くイクヨに自分の人生の何かを押し付けていたとして、では、押し付けられたイクヨは道を歩き続け、どこに行くというのか。

おそらくは、また、押し付けられる。

押し付けられて、動けなくなる。

きっと、また、何かを――

イクヨは大人に愛される子供だった。

――イクヨちゃんはいいい子だね。

――イクヨちゃんは賢いねえ。

——イクヨちゃんは可愛いねえ。

——イクヨちゃんは偉いねえ。

——イクヨちゃんは……。

イクヨの周りの大人たちはイクヨのことを見ていなかった。

いや、そもそも、大人というものは子供のことなどちゃんと見ていないのかもしれない。子供の自意識などそっちのけで、大人は大人の自意識を押し付けてくる。

——イクヨちゃんはいいい子だね。

——イクヨちゃんは賢いねえ。

——イクヨちゃんは可愛いねえ。

——イクヨちゃんは偉いねえ。

——イクヨちゃんは……。

子供はみんな大人の言うことを聞いて育つ。しかし、多くの大人は実は子供がしっかりと物を考えられることなんて知らない。大人にとって子供はどこまでも子供で、子供とは物を考えないし、自分で行動の判断などできやしない。自分で何かを選ぶことなんてできないと考えていた。

しかし、子供は実際には大人たちの考えとは逆だった。

しっかりと考えることが出来たし、自分の判断やともすれば分別なども、大人よりも持っていた。

大人は多くの場合、子供のことを甘く見ていた。なぜなら、子供だからだ。

子供は大人が守るべき対象で、子供は大人が面倒を見なければならなくて、子供の責任は大人の責任だった。だから、大人は子供が好きにすることを許さなかったし、だからこそ、大人は子供に対してある程度の決めつけを行うのだった。

子供の性格は子供自身の成長によって形作られるわけではなく、大人が決めたものに子供が寄り添うことによって出来上がっていくのだと、イクヨは考えていた。

しかし、そんな子供の考えなんて、大人は知らない。

——イクヨちゃんはいいい子だね。

——イクヨちゃんは賢いねえ。

——イクヨちゃんは可愛いねえ。

——イクヨちゃんは偉いねえ。

——イクヨちゃんは……。

イクヨはイクヨのものではなかった。

イクヨはイクヨではないもので出来ていた。

イクヨだけでなく、他の子供たちも同じく、子供たちのものではなかった。

子供たちは大人の子供だった。

子供たちは大人のものだった。

子供のすべては大人のものだった。

大人はそんなこと考えもしなかった。ただ大人は自分の言葉が、自分の態度が、子供のためになっていると信じているだけなのだ。そこに悪意などはない。悪意なく、子供は大人のものとなっていく。

子供には大人のたぐさんが詰め込まれていく。

大人のたぐさんが詰め込まれていく。

ぎゅうぎゅうに詰まったたぐさんは子供に詰まって、子供は大人に背負われ運ばれる。愛しく大切な荷物として子供は扱われ、大人に運ばれていく。

——イクヨちゃんはいいい子だね。

——イクヨちゃんは賢いねえ。

——イクヨちゃんは可愛いねえ。

——イクヨちゃんは偉いねえ。

——イクヨちゃんは……。

「うるさい」

頭を撫でてくる言葉に怒鳴る。

押し付けられる言葉をはねのける。

イクヨは我慢がならなかった。

こ・こ・でも・何・も・選・べ・ない・の・か・と、怒りが込み上げてきた。

——イクヨちゃんが怒ったよ。

——イクヨちゃんは何で怒ったんだい？

——イクヨちゃんはいいい子なんだから、怒っちゃあいけないよ

——イクヨちゃんは怒るような子じゃないんだよ。

——イクヨちゃんは……。

子供の怒りは大人の言葉に丸め込まれる。

大人の言葉はイクヨを縛る、縛る、縛り付ける。

大人の言葉によって、子供のイクヨは形が決まっていく。

いい子で、賢くて、可愛い子に、なっていく。

大人のたぐさんが、イクヨに詰め込まれていく。

まるで、夏休みのキャンプに不必要なほど荷物を詰め込まれたリュックサックのように。そして、多くの場合、荷物を詰め込みすぎるのはいつだって大人のやることなのだ。

大人の言いつけを詰め込み、詰め込み、怒っても、反抗しても、丸め込まれ、慰められて、子供のイクヨは大人のリュックサックになっていく。

リュックサックの中にはイクヨの大切なものなど何もない。

イクヨのものではないリュックが、イクヨのものとして背負わされる。

——イクヨちゃんはいいい子だね。

——イクヨちゃんは賢いねえ。

——イクヨちゃんは可愛いねえ。

——イクヨちゃんは偉いねえ。

——イクヨちゃんは……。

——イクヨちゃんは……。

道の上にイクヨは立っていた。

その道は確かにイクヨが歩いてきた道だった。

なのに、その道がイクヨの道だったと、イクヨは確信が持てなかった。

白い玉砂利の道はどこまでも続いている。

道の幅は平均台の細さではなく、いつもの広さに戻っていた。

イクヨは一步だけ、足を踏み出した。

重かった。ひどく重かった。足が重いのではない、イクヨの体自体が重いのだ。

イクヨは背負っていた。大きなリュックサックを背負っていた。

リュックサックはばんばんに膨らんでいた。もうこれ以上詰め込むことはできないほどに膨らんでいた。

そして、リュックサックからはささやき声が聞こえてくる。

——イクヨちゃんは……。

と、イクヨを愛した大人の声がいくつも重なって聞こえてくる。

重なる声は広がり響き、さわさわと、イクヨの耳を震わせた。

イクヨは我慢がならず、叫んだ。

暗がりに向かって、叫んだ。

「うるさい！！！！」

しかし、イクヨの声は、どこまでも広がる暗がりには吸われて消えただけだった。

イクヨは母に愛された娘だった。

「おはよう」

母は言った。にこやかに言った。

母はいつもイクヨに笑って挨拶をする。とてもやさしく、挨拶をする。

「あなたはどなたかしら？」

と、いつも続けるのだ。

母が認知症の症状を見せ始めたのは還暦を過ぎて何年か経ってからだった。まだ、高齢者と呼ぶには元気のある姿からは想像もできないようなことだった。だから、診察室で母の病気について医者から説明をされているとき、イクヨはひどく現実離れた、どこか、自分の家族のことではないような、そんな気がしていた。その病気はいわゆる、『老人』になつてから罹る病気で、自分にとっては母まだ『老人』と呼ぶような域には達していないと思っていた。

しかし、症状が進むにつれて、それが否応なしの現実で、母は『老人』なのだと、思い知らされた。

母は料理が好きだった。惣菜など、出来合いのもので済ますことがほとんどなかった。子供たちが独り立ちしてから、父のために毎日何か作っていた。二人だけなのだからもっと楽をすればいいのに。と、イクヨはよく母に話した。

そういう類の話をすると、母は決まって、

「だって、お父さん私の料理好きなんだから」

と、はにかむのだった。その何とも言えない顔がとても可愛らしく感じられて、イクヨは母を愛おしいと感じていた。だから、病気に罹った最初の頃、料理が出来なくなってしまう時の、母の顔が忘れられなかった。

材料をまな板の上に並べて、包丁を手にして固まったまま、母は言った。

「私は、何をしようとしていたのかしら？」

その時の母の顔には何もなく、ただ無表情で、悲壮感のようなものを感じたのはきつと、イクヨの心がそうさせたのだろう。

母は今、施設にいる。

症状の始めた頃こそ、自宅で介護をすればいいのだと、家族全員で話し合ってた。決めた。だが、数年前に父が他界したのをきっかけに、兄弟たちも自分の生活を優先したいと口にし始め、結局は施設に入れて面倒を見てもらうことを選択した。

イクヨは三十代の後半で離婚をしてから、ずっと独身だった。子供もない。だから半ば必然的に母の身の回りの世話をするようになった。と言っても、イクヨにはほとんどすることなどない。施設で他の入所者の老人と共に生活をしている母の様子を週に一度見に行く程度だ。

イクヨが施設を訪ねると、母は大抵、他の入所者とおしゃべりをしていた。にこやかに、健全に、健康な笑顔で楽し気に話をしていた。その様子だけ見ていると何の問題もないように感じられた。そのまま声をかけて、イクヨの住む家へ連れ出しても何も問題がないように感じた。だが、母を含め施設の入所者たちの会話にはまったくの脈絡も会話の筋もない。なんの関連もない話や出来事が当然のように突然に現れては消えていく。会話の因果関係が完全に破綻していた。彼女たちには正しい時間が存在しない。教えてくれる時間はそれぞれがてんでバラバラで、また、彼女たちはここは自分の家だと主張し、同時に、兄弟の家だと言いい、イクヨのことを見て、お母さんと言った。

そういう会話をしているとき、イクヨには、母と他の入所者の顔の区別がつかなくなかった。あんなに見知った母の顔を見つけることが出来なくなった。

まただ。

また、何も選べない人生を歩かされている。

イクヨは道に転がる石を見つめていた。

背中のリュックサックは重い。重すぎて、足を進めることが難しい。難しいが、無理やりにでもイクヨは前に進んでいた。

自分の人生を歩むことのできないイクヨはまたしても不幸になるだろう。そのことをイクヨはわかっていた。どんなことをしても、いや、何もしないから、イクヨはどんどん不幸になる。自ら望まない人生を歩むことになる。望んだものなど何一つない人生となる。

だから、イクヨは歩く。これは自分の人生なのだと玉砂利の道を歩く。それは執着だった。途方もないほどの強い執着心だ。内臓の奥からこみあげてくる。必死な感覚がぞぞりと、這い上がってきて、イクヨの足を動かす。ミミズのような、蛇のような、長く這いまわる不快な生き物が、イクヨの内側を蠢いていた。だが、その生き物が足を動かしていた。

もはや、手にした荷物のほとんどが鉄の枷となって、イクヨの歩みを阻んでいた。いくつものイクヨの人生から手渡された品の一つ一つが、イクヨを前に進ませまいとしていた。

病気になる前、母はイクヨの話を聞くのが好きだった。どんなことでもよかった。朝起きた後にいつもすること、自分に向いている仕事。恋愛観、結婚観。同僚の悪口、イクヨがどんな生活をしてどんな毎日を送っているのかをただ、静かに微笑んで聞いていくくれた。

独身時代に働いていた会社ではそれなりの役職についていた。表彰もされた。だから、結婚して退社するか否か迷ったとき、イクヨは母に相談をした。母は、いつものように少し微笑みながらイクヨの話を聞いたあと、静かに言った。

「イクヨちゃんの好きにすればいいのよ」

イクヨは結婚をきっかけに退社した。部署のみんなが祝福してくれた。しかし、結婚生活はそれほど順調には進まなかった。夫との価値観や人生観のずれが原因で子供がなかなか出来なかったこともあり、結婚当初の暖かさは早々に消え去り、二人で過ごす時間はだんだんと冷えたものになっていった。それでも、40歳を目前に控えていたことや円満退社をしたことに対する引け目も手伝って、なかなか離婚に踏み出すことが出来なかった。そんな時も母はいつも同じ言葉を投げかけるだけだった。

「イクヨちゃんの好きにすればいいのよ」

好きにすればいい、とはどういうことなのか。

好きにすればいいというのは、考えなくてもいいということではないのか。

考えなくてもいいということは、自ら選択を放棄しているということではないのか。

選べるものがあるのに、選ばない。二つの選択の一つを確かに選んだはずでも、その実、その選択は選ばれている。その瞬間はそれが最適な回答に見えたとしても、よく考えないで選ばされた回答は自分の選んだものではないから、時が過ぎた時に突然、わからなくなる。

これが正しかったのか。

これで、正しかったのか。

好きに選んだ回答は自分の選んだことだったのか。

それでも、自分を納得させる必要がある。自分は間違っていないと思ひこむ必要がある。でなければ、自分で選んだものは何一つないのだと、自覚することになってしまう。

荷物が食い込む。重く、のしかかる。背負ったリュックからは声がする。

——イクヨちゃん、イクヨちゃん……

と、母のささやく声がする。

——イクヨちゃんの好きにすればいいのよ。

だったら、何で進む道の邪魔をするのか。

この足を踏み出すのをなぜ邪魔するのか。

私は、この道を歩きたいのだ。

——選ばせるな。

——選ばせろ。

初めて昇進したとき、母は大喜びだった。平社員から主任に、主任から係長へと役職が上がる報告をするたびに、手間のかかる料理を振舞ってくれた。昇進したイクヨ自身は社内の責任が課せられるだけで、そこまで嬉しいことだとは思っていなかったが、母が喜ぶ姿を見ていると、そこまで悪い気もしなかった。

しかし、母はイクヨの、初めてのスーツを、一緒に買いに行ったことを覚えていない。

——首にかかった役職プレートの紐が、イクヨの喉を締め上げる。

化粧品をたくさん買い込んだ日があった。友人の結婚式に出席すると母に告げたら、あれもこれもと買うことになった。普段、必要な程度しかないイクヨのメイクに母は文句を言った。「こういう時でもない出会いがないんだから」と、出席自体に気のなかったイクヨよりも気合を入れてイクヨのメイクを張り切った。母の努力の甲斐かどうかはわからないが、結婚式の会場で結婚するべきパートナーと出会った。

しかし、母はリップをクレヨンと間違えるようになった。

——化粧品の一つ一つが手枷となって、イクヨの腕に絡みつく。

ウェディングドレスは母が選んだ。質素なウェディングドレスだったが、イクヨはそれを感じ入ったし、夫も褒めてくれた。

しかしもはや、母はイクヨの顔を覚えていない。

——ドレスと中年男が荷物の上に乗りこんで、更なる重みをイクヨに与える。

台所で包丁を握って、母は笑う。

母は笑う。

母は――。

――包丁が、イクヨの胸を刺し貫いて、イクヨは道の上に倒れこんだ。

母は何も覚えていない。自分が誰だったのか、どこで生まれたのか、誰と結婚して誰と共に生活をし、何人子供を産んで、子供たちはどんな成長をしたのか。そして、それらの人生の中で交わされた会話や繋がりがどんなものだったのか。

自分の人生をどこかに渡してしまっただけ、今、目の前のテーブルでおしゃべりしている母は、母の形をした何か違うものだった。違うものののに、母の姿で、母の声で、一心不乱にしゃべり続ける。しゃべり続けている。

私は、と、イクヨは思った。

私はどうしたらいいのか。

この母を前にして、私はまだ、この人を母だと思い続けることが出来るのだろうか。思い続けたところで、この人が、私の母になることはない。母はずっと母であり、それ以外の何者でもない。これから先の一生、私は母と共に生きていくのだろうか。きつと、生きていくのだ。私は母を愛しているし、母は私を愛していた。愛情が人同士をつないでいるのなら、私と母はまだ親子なのだ。そして私は、その事実があるだけで充分幸せなのだ。

——本当に？

——本当に、そう思っているのか？

その問いかけが、ひどく鮮明に浮かんだ。浮かんだが、イクヨは問いかけを頭の隅に追いやった。

本・当・に・そ・う・思・っ・て・い・る・に・決・ま・っ・て・い・る・。

イクヨは母だった人の手を優しく握った。

母だった人は、イクヨの顔を見て、母の静かなほほえみを浮かべた。

イクヨは道の上で動けなかった。

イクヨに押し付けられた物たちが動きを奪っていた。重く、痛く、苦しかった。一人で何も持たないで歩き続けていた時にはそんなことも何も思わなかった。辛くもなかったし、苦しくもなかった。だが、歩く先々でたくさんさんのイクヨが、歩くイクヨに手渡した人生はイクヨをひどく苦しませていた。苦しませ、悩ませ、葛藤させていた。

道に崩れ落ちるイクヨはこのまま歩くことが自分で選んだことなのかはやわからなくなっていた。いや、自分で選んだことはわかっていて。ただ、その選択が正しいのかどうか、わからなくなっていた。

正しさなど、気にしたことはなかった。ただどこまでも続く道を歩き続けることだけが目的であり、どんなことがあっても歩き続けられると確信していた。

なのに、私は今、動くことが出来ないでいる。

いくつものイクヨが、歩くことを阻んでいる。自分の人生を歩めなかったイクヨ達が、嫉妬に任せてイクヨを苦しめている。

そんなこと知ったことではない、と、イクヨは叫びたかった。私には関係のないことだと、イクヨは叫びたかった。しかし、いくつものイクヨは確かに、ここにいるイクヨと同じであった。同じだった。

このイクヨは確かに、OLだった。

このイクヨは確かに、花嫁だった。

このイクヨは確かに、妻だった。

このイクヨは確かに、子供だった。

このイクヨは確かに、娘だった。

いくつものイクヨの中に、イクヨはいた。

「イクヨちゃんは偉いねえ」

声がして、イクヨは首だけを上げた。

道の上に、母がいた。

車椅子に乗った母がいた。

どこまでも続く真っ白い道の上で、どこまでも続く暗がりを背にして、母は、イクヨに向かって静かに微笑んでいた。

本・当・に・そ・う・思・っ・て・い・る・に・決・ま・っ・て・い・る・。

と、イクヨが言った。

そのイクヨは、私ではなかった。

殺風景だなど、私は思った。どこまで行っても同じ風景しか続かない。周りは一面真っ暗で、目の前にずっと続いている真っ白い石の道だけがどこまでも続いている。そんな場所をずっと歩き続けている。

車椅子のハンドルに石の振動が伝わってくる。細かな振動だ。私は車椅子に乗る母に大丈夫かと、尋ねる。母はゆっくりと、

「大丈夫よ」

と、答えた。

私はウェディングドレスを着ている。母が結婚式に選んでくれたものだ。私はこのウェディングドレスを本当に気に入っている。私の隣には夫が私の歩調に合わせてゆっくり歩いている。若く、優しい夫だ。争いごとを好まない、とても穏やかな人で、知り合ってからこれまで彼が怒ったところを一度も見ることがない。そして、後ろにはタキシード姿のもう一人の夫がいた。その夫は中年で卑しい男だった。私はその夫が好きではなかった。だが、彼は私のことを愛しているようで、私がどんなにひどい言葉を浴びせても、ひどい態度を示しても、私についてきた。仕方がないから私の荷物を持たせている。化粧品や、荷物の入った大きなリュックサックをふうふう言いながら運んでいる。

道は本当にずっと、長く続いている。いつから歩き始めたのか覚えていないが、ずっと前から歩き続けているような気がする。きつと、実際にずっと長く歩き続けているのだと思う。母けれど、なぜ、こんな道を歩き始めたのか覚えていない。二人の夫も分らないと言う。母に聞いても、わからないと言う。

けれど、母はわからないと言った後に必ずこう付け加えた。

「イクヨちゃんと一緒ならどこでもいいわ」

母がそう言うのならそれでよかった。

私と母と若い夫はいつも何かの話をしていた。同じ歩調で、同じスピードで——もつとも、母は車椅子なので私の歩くスピードと同じになるのは当たり前だけれど——、相手のことを気遣いながらのおしゃべりは家の中でリラックスしながら会話するのとは違った特別さがある。

大抵の場合、夫と私の二人が盛り上がり過ぎて、母が微笑みながら話を聞いていた。何かの拍子に他愛もないことでとても可笑しくなって、三人でお腹が抱えるほど笑ったりした。そんな風にして進む道のりはたとえあたりの風景に色気がなかったとしても、穏やかな昼下がりの散歩みたいでとても心地がいい。緑豊かな公園でも歩いているような気分になる。

「その夫は偽物さ。お前の本当の夫は私なんだ。もつとも、本当の君も、私のことを嫌っていたがね」

と、中年の夫が時々そんな風に喚きたてる。しかし、その言葉を私達に向かって言うのではなく、暗がりに向かって突然叫びだすので、ひどくびっくりする。彼の声は人の気分を害

することを得意としていて、彼が叫びだすと不愉快な気持ちが口から飛び出てきそうになった。

きつと、寂しいんだよ、と、若い夫は言った。そして続けて、「そっとおいてあげよう。相手にしない方がああいう人は幸せなんだ」と言った。

笑顔と、柔らかな会話と時折の悪態の中で私たちは道を歩き続けていた。

どれぐらい歩いたのかわからないけれど、とにかく、しばらくの時間、私達は変わらない風景の中を歩き続けた。そして、道の終わりに辿り着いた。

そこは、紛れもなく道の終わりだった。白い玉砂利の道は完全に途絶えていた。

私と若い夫は母を乗せた車椅子を少し離れたところに置いて、途切れた道の端に立ち、眼下の真っ黒な暗がり眺めた。光も何もない真っ黒な空間がどこまでも続いている。道は暗がりの空間に浮かんできて、崖にもなっていない。

道は、ここで終わっていた。

「どうしようか」

若い夫が聞いてきた。しかし、私もどうしたらいいのかわからなかった。とにかく、ここで道が終わっている以上、私達はここからどこにも行けないということだ。

答えが見つからず戸惑っていると、母が手を挙げて私達を呼んだ。

「考えていても仕方ないでしょう。おしゃべりの続きをしましょう」

確かにそれもそうだった。道がなくても困らない。別に、歩きたくて歩き続けていたわけではないのだ。そもそも、何を理由にしてこの道を歩いていたのかも思い出せないのだ。道がないならそれで良しとして、道の終わりのこの場所で過ごせばいいのだ。

私達は話をした。歩きながらしていた話の続きだった。趣味の話、仕事の話、食事の話、夫の妙な癖の話、私の子供の頃の話、母の子供の頃の話、そんないろいろな話を三人で続けた。

中年の夫は会話には加わらなかった。ただ、離れたところで宙を見つめながら呆然としてた。何を考えているのかはわからなかった。

夢中に話をし続けていた。話しても、話しても、会話は途切れなかった。夫は明るく笑い、母は静かに微笑んでいた。それはとても幸福な時間だった。ただ、楽しいおしゃべりをずっとしているだけなのに、とても幸せだと感じていた。

「満足か」

と、突然、中年の夫が叫んだ。顔を真っ赤にして額に脂汗を滲ませながら、彼はどうやら何かに怒っているようだった。

「これで満足か」

彼の怒りの矛先はどうやら私達のようなだった。

「そんな会話をして何が楽しいんだ。これからどこへ行くんだ。どこにも行かないのか。だったら、俺はなんでここにいるんだ」

容量の得ない言葉を彼は叫んだ。それはまるでどこかの誰かに助けを求めているかのよ

うだった。

「こんな風にどこにも行かないのなら、まだ、彼女の方が良かった。少なくとも俺は彼女のことを愛していた。彼女が私のことを愛していないのは知っていたが、私は彼女を愛していたんだ」

気がふれたかのように——実際にどうになくなってしまったのかもしれない——叫ぶ彼に、私達は危険を感じた。私は母を隠すように立ち、さらにその前に若い夫が盾となるように立った。

「なんだ？ なにか俺はおかしなことを言っているのか？　なんで、お前たちは俺のことをそんな風に見るんだ。そもそも俺はお前たちとは無関係だ。いや、違う。無関係なのはお前たちだ。お前たちの方なんだ」

自分の身を守るための私達の行動が彼の癪に障ったようだった。彼はリュックの脇のポケットから包丁を取り出して、まっすぐにこちらに向かってきた。

若い夫が私達を守る姿勢になった。ぐっと身構えて、彼が襲い掛かって来るのに備えた。中年の夫が駆け込んできて、そのまま若い夫にぶつかった。何事か叫びながら二人は倒れて組み合った。

私と母はただその様子を見ていることしかできなかった。私は母の頭を抱きかかえて守っていた。

もみ合いはしばらく続いて、やがて、中年の夫がゆっくりと立ち上がった。窮屈そうなタキシードが真っ赤になっていた。若い夫は倒れ、その胸には包丁が突き立って、赤い血液が彼の服を濡らしていた。

既視感があった。倒れた彼の姿に見覚えがあった。それは見たままの状況にだけ思ったわけではなく、こんなことが確かにあった気がするという、経験のデジャヴだった。

中年の夫がこちらを向いた。その顔はひどく疲れ切った顔をしていた。

「お前じゃない」

小さいが太く確かな声で彼は言った。しかし、その言葉の意味がわからなかった。

「お前はイクヨじゃないんだよ」

どういふことなのか。それは彼の求める私が今の私ではないということなのだろうか。私は変わってしまったということなのだろうか。彼は彼の求める私になれと言っているのだろうか。そのための脅しとして、彼は若い夫を殺したのか？

「あなたはイクヨちゃんよ」

母が私の腕を掴んで言った。その声は今のこの状況に似つかわしくないぐらいにやさ勝った。優しすぎた。母の顔は静かに微笑んでいた。

「なんで笑っているの？」

「イクヨちゃんがここにいるからよ」

「どういうこと？」

「イクヨちゃんは可愛いもの。イクヨちゃんがいてくれると嬉しいわ」

合っているはずの母の目は私を見ていなかった。ただ、私の目を見ているだけだった。いや、この母の目には何も映っていなかった。

「あの人が、死んだのよ」

「イクヨちゃんは可愛いから、大丈夫」

「ねえ、あそこに倒れている」

「イクヨちゃんは頭がいいから」

「あんなに血を流しているのよ」

言葉を投げかければかけるほど、母は違う何かになっていくようだった。さっきまであんなに楽しく話をしていた母がまったくの別の何かになっていくようだった。いや、もう、なっていた。

そこには母の形をした何かが車椅子に座っていた。

これは、誰だろう。私の目に映る『それ』は確かにさっきまで母だったのに、母だと感じていたのに。

「ほら、違うだろう？ 違うんだ。ここは、お前の道じゃない」

中年の夫が耳元で囁いた。若い夫はお腹から血を流して倒れている。

「このウェディングドレスは私が選んだんだ。君は嫌がっていた」

化粧品がリュックからこぼれていた。

「これは、君の物だろう？」

目の前に、茶色のプレートが差し出された。そこには『イクヨ主任』と白い文字で書かれていた。

リュックサックから声が聞こえてきた。それは大人の声だった。大人の声が聞こえてくる。

「違う」

私はぼつりと口にした。

「何が違う？ あの母は君の母じゃない。俺と一緒に歩いた道が君の道だ。君は君が選んだ場所に戻るんだ。この道は途絶えてる。どこにも行けない。けれど、元の道ならどこまでもいける。君が選んだ道だから」

「違う。そうじゃない」

私は、イクヨだった。イクヨはただ、歩いていたのだ。ただ自分の道を選んで歩いていたのだ。ただ歩いていたのに、誰かがイクヨにたくさんの人生を押し付けた。それが最初からイクヨが選んだように仕向けて。だから、イクヨ自身が歩いていた道も、きっと、誰かの道なのだ。あるいは、自分の道だと信じた道がいつの間にか他人の道になっていたのだ。

歩いているだけでいいのだと、自分の頭で考えることを放棄していたのだ。ただ歩きながらでも、選ばなければならぬのだ。ここを歩き続けるのなら、この道を進むのならば、それでもなお、たくさんの物を選択し、選ばなければならない。

「だから——」

私は、中年男にキスをした。

彼は突然のことに驚き、慌てた。

私は唇を押し付けたまま、道の端まで進んだ。彼は後ずさる。彼は突然のキスにどうしたらしいのかわからないままだ。道の端で私達は抱き合った。

「ずっとこうしたかったんだ」

タキシード姿の中年の夫は恍惚とした顔で満足げに言った。

「私はそうでもない」

と、私は容赦なく、彼を突き飛ばした。

彼は何が起こったのかわからないという顔だった。何か言いたげだった。しかし、何か言出す前に、彼は暗がりの中に落ちていった。

私は道に残ったいろいろな物を道の外に捨てていった。

若い夫を引きずって、お腹に刺さる包丁ごと捨てた。

ドレスを脱ぎ去り、役職プレートと一緒に放り投げた。

リュックを足蹴にして転がり落した。化粧品も一緒に落ちていった。

最後に、母がいた。

母の姿をした何かがこちらを見て微笑んでいた。

「イクヨちゃんはすごいわねえ」

「別に、何もすごいわい」

そう、これはただの選択だ。

私は私が進む道に戻るために、すべてを選択しなければならなかった。

そこに起こることをただ受け入れるのではなく、しっかりと否定しなければならなかった。そういった強い選択をしなければ、自分がどこを歩いているのかさえわからなくなってしまう。だから。

私は車椅子を途切れた道の端まで押していった。

道の端の下には真っ黒な暗がりがどこまでも続いていた。

母だった何かが、ハンドルを持つイクヨの手を握った。

「イクヨちゃんはやっぱりすごいわ」

「……そうかもしれない」

私は、車椅子ごと、母を落とした。

母は落ちていった。暗がりの中に。

誰もいなくなった道の上に、私は立っていた。

ここは、私の道ではなかった。最初に選んだ道ではなくなっていた。

戻ろう。私の道へ。そして、今度は選ぼう。私の道の私の物を選ぶのだ。

私は、道の端から、身を投げた。

イクヨは八十五歳の老婆だった。

イクヨは大型の百貨店に来ていた。

もちろん、一人でそんなところには来れないから、孫娘に車椅子を押してもらっている。最近ではなかなか一人でできることが少なくなってきた。食事にしろ、着替えにしろ。なかなか大変だ。しかし、それでも自分の勝手にどうにかなることに關しては極力どうにかやっている。

今日は久しぶりに孫夫婦が訪ねてきた。だからみなでお買い物に来たのだった。

百貨店の中は大勢の人だった。ひ孫の男の子が駆け回ってしまうので、孫の婿が階段脇のベンチであやすことになった。イクヨと孫娘の二人で買い物をしてきたらいいと言われたので、その言葉に甘えることにした。

孫娘と二人で服やアクセサリーを見て回り、欲しいものがあれば買ってあげた。

孫娘は申し訳なさそうにしていたが、祖母の甲斐性としてそれぐらいのことはさせて貰いたかった。

「お婆ちゃんは何か欲しいものはないの？」

と、孫娘が聞いてきた。

そんなに欲しいものなどなかった。年を取れば、欲も少なくなる。

けれど、イクヨは胸の中にふつりと、何かが湧いたような気がした。

その『ふつり』はイクヨの目を百貨店のフロア全体を見渡させていて、そうして、とても気になるお店を見つけた。

「あそこに行きたいわ」

とイクヨはそのお店を指した。

孫娘はイクヨの指すお店を見て不思議な顔をしたが、すぐにそちらに向かって車椅子を押していった。

そこは下着の専門店だった。

ピンクや青い可愛いものやおしゃれなものまで扱っていた。

イクヨにはどの下着もとてもきれいに、魅力的に見えた。

「どれにする？」

孫娘はどこか嬉しそうな声で、イクヨに言った。

イクヨは車椅子のホルダーから自分の杖を握って立ち上がり、目の前の棚にかけられていた、白いフリルの付いたとても愛らしいブラジャーを手を取った。

「これにするわ」

そして、イクヨはとても素敵な顔で笑った。